

船橋市障害者生活支援事業

2001年1月発行

船橋障害者自立生活センターニュース号外

相談室だより 第12号

WAVEふなばし相談室

〒273-0011 船橋市湊町1-20-3 ミナトハイツ102号

TEL: 047-495-6777 / FAX: 047-495-6776



2001年の始まりにあたって 支援事業の現場から訴える

97年に始めた私たちの障害者生活支援事業は、21世紀を迎えた今年5年目に入る。

この間、多少の変動はあったが毎年千件を越える相談があり、自立生活を開始した障害者も何人かいる。さらに身障者以外の障害者や対象地域外の人からの相談も少なくない。そして、こうした活動の中で、昨年は加盟している全国連絡協議会の職員研修会の開催を引き受けることになり、11月に各地から100名の参加者を迎えて2日間の集会を持つことができた。

そこでは事業に取り組んでいる各地それぞれの報告や提起があり、学ぶところも大変あったが、それよりも言っておきたいのは事業をとりまく現実の貧しさと、将来に展望がないことだ。97年当時、この事業は人口30万人当たり2箇所設けると厚生省は計画していた。つまり、当初は全国で2000箇所設ける計画であったのだが、いつのまにかそれが700足らずの設置に変わり、現状はしかもその5分の1弱にとどまっている。千葉県では当センターの後、1箇所の設置もまだない状態だ。

支援事業の基になったいわゆる〈障害者プラン〉は、2002年までの限定計画になっている。そしてこの年は現在進行中の基礎構造改革の仕上げの年になり、2003年からは契約中心の施策にとって変わるとのことだ。その結果、この事業そのものはなくなるとも、内容、性格などは変わることも考えられる。好く変わるならいいがそうでなかったら、私たちのいまの努力も無になりかねない。

開始から5年、現場にあって感じるのは、この事業は際限がないことだ。生活のつづく限り、それへの支援もつづいていく。従って言えるのは、この事業を必要とする障害者が地域にいるということである。行政がそれを知っているなら、5年も県で1箇所だけにしておくとか、目標から遠い設置数で平気であるなどできない筈だ。〈障害者プラン〉の残された期限は2年しかない。この際、厚生省や県、その他機関の特段の努力を2001年の年頭に当たり、声を大にして訴えたいと思います。

(宮尾)



障害者の年末年始

～最近の相談から～



皆さん良いお正月をお迎えになりましたか。

毎年思うことですが、盆や正月だからといって障害者は障害者を辞めるわけにはいかないんですね。それなのに年末年始はなぜかサービスが休みになってしまいます。

今年も年末年始に関する相談がきました。某施設からはお正月を自宅で迎えたいけれど施設の送迎サービスが休みなので、センターのリフトカーで送迎してもらえないだろうかとのこと。別の方からは12月30日か

ら1月3日までヘルパーさんも配食も休みなので30日か31日に食事を作りに来てもらいたいとのこと。またある人はご家族が高齢なので、お正月くらいゆっくりしてもらいたいと介助者と一緒に旅行にいけました。この年末年始もセンターの介助者やボランティアは大忙しでした。

鉄道や消防、警察なみに介助サービスも年中無休の体制を作ってもらいたいものです。

(前田)

～ コラム ～

貫く棒

宮尾 修

去年今年貫く棒のごときもの

高浜虚子の俳句です。新年になると、新聞その他でよく使われる句ですが、年が変わったからといって、それで生活や社会の現実までが変わるわけではありません。そこにあるのは昨日につづく今日であり、連続する時の営みです。

私たちのセンターも設立から10年、支援事業を始めて5年目を数えますが、その間の経験は何であったにせよ、ひとつ残らず貴重であり、今の私たちに繋がっています。ですから、新年への抱負も、幕を開けた21世紀への想いも、重ねてきた過去の歴史と離すことはできないのですが、それにしても年が変わって、何か好いことはないかと思いたいのも事実です。

去年は春に小菅浩一さん、秋は高野博之さんが急逝されるなど、悲しいことが重なりました。小菅さんのことは前に書きましたが、高野さんもなくなる直前にお会いしており、一緒にパソコン将棋を楽しんだばかりだったので、突然の訃報には言葉もありませんでした。

実際の年齢は50代でしたが、高野さんは少年の心と青年の情熱、そこに大人の分別をも持っていたような人で、電動車いすの後ろに骸骨の玩具をぶら下げているなど、茶目つけたっぷりなところもありました。ですから、全部で半年ほどの交わりでしたが、仲間みんなと親しくなって、センターの人気者になっていました。

残念でならないのは、高野さんも小菅さんも、センターの存在を知って自立の決心をした矢先の死であったことです。天命とってしまえばそれまでですが、自立支援が中心のセンターとしては、それでは済まないような想いもあります。障害者一人一人にとってセンターとは何か、真っ先にすべきことは何なのか、もう一度考える必要がある。

とまれ新年です。新しい世紀の始りにふさわしい年としたいもの。飯田龍太のこんな句のような春を迎えたいと思います。

いきいきと三月生まる雲の奥



人物紹介

遠藤 高子



これまでお勤めされた職場を定年退職されたのを機会に昨年9月からボランティアとして働いてくださっています。このセンターは重度障害者が運営している会ですから、どうしても仕事を手伝ってくださる方が必要です。しかもボランティアなら最高！ 早速、会議の記録などをお願いしたら素晴らしいまとめ方で、私たちにはもったいないくらいです。文章にうるさい宮尾さんも大満足。

これからもお体を大切に。

センターが困ったときは手伝ってください。



ほっと in ふなばし芸術祭

- ・ 美術展 2月6日(火)～11日(日) 船橋市民ギャラリー
開館時間＝午前10時～午後6時（最終日4時まで）
 - ・ ステージ＝10日（土）
 - ・ 体験工房＝11日（日）
- 船橋市勤労市民センター

センターのグラフィッカーも出展するかもしれませんと。